

## 困難を抱える子どもへの動物介在活動による支援事業「みんなラポール」の展望

動物愛護センター ふれあい課

○阿部 理恵、中村 克敏、田玉 栞、松澤 淑美

### 1 はじめに

動物愛護センター(以下、センターという)は、長野県における動物愛護事業の拠点施設として平成12年4月に開設され、動物愛護思想の普及啓発を実施している。その中には、動物を介在した対人支援の取組みも含まれる。そのひとつが不登校等困難を抱える子どもへの支援である。

令和5年度における長野県内小・中学校における不登校児童生徒数は7060人(前年度から1325人増)で、2024年の県内における20歳未満の自殺者数が12名と高止まりである中で、「困難を抱える子どもへの動物介在活動支援事業」は、長野県総合5か年計画「しあわせ信州創造プラン3.0」の中で、子どもの支援や自殺対策事業としても位置付けられ、国庫補助事業となっている。この取組みについては、令和5年度日本獣医師会獣医学術学会において、「社会から大きな期待が寄せられている分野であり、動物が有用なツールとなる可能性を示したことがワンヘルスの観点からも高く評価できる」として、獣医学術奨励賞を受賞した。このことから動物愛護管理行政が対人支援も実施していることは全国的にも例がなく、益々重要性が増すと考えられる。

当支援は2つあり、1つは個別対応の「子どもサポート」、もう1つは「おでかけ子どもサポート」である。「おでかけ子どもサポート」とは、県下5か所で動物介在活動を行うことができる基盤づくりを目指して実施している。

3つめの事業として、令和4年度より、少人数の集団での活動を想定し、ステップアップの位置づけとなる「みんなラポール」(「ラポール」:フランス語で「信頼関係」の意)を開始し、継続している。当該事業について、今年度の現状と今後の展望について考察したので報告する。

### 2 事業概要

#### (1)目的

動物とのふれあいやお世話などの活動を中心とした居場所づくりを通し、不登校やひきこもりなどの困難を抱える子ども等を支援する。

「子どもサポート」の個別対応からの、段階的に小集団の生活へ移させるステップアップの場として、複数人での活動の場を提供し、社会活動につながる一助とする。

#### (2)内容

日時:毎月第4木曜日 午後1時30分～3時30分(7月と11月はワークショップ開催)

場所:動物愛護センター レクチャールーム

定員は各日10組の予約制

原則として保護者の方など、大人の方同伴

動物とのふれあい、館内探検、お絵かき、読書、迷子札づくりなど、参加者の好きな活動を行った。

#### (3)ワークショップ

テーマを決めて集まる居場所として、年2回の特別企画とした。ワークショップに参加し、その作品を通してセンターのために役立つものができたという自信につながるようなテーマとなるように心掛けた。内容的にはだれでも楽しめる内容ではあるが、困難を抱える子どもの活動の場となるよう周知方法を工夫した。

【7月 25 日】講師：画家 森泉智哉氏

内容：「ハローアニマルのチラシをつくろう！」

参加者にキッズカメラを貸出し、動物たちを観察、写真撮影をしたものをもとに、イラストを描いた。  
参加者の描いた動物のイラストをもとに講師が既存のチラシ文言にイラストを挿入、作製した。

【11 月 28 日】講師：フォトグラファー＆ライター プリチャード香里氏

内容：「みんなの魅力はっけん！ どうぶつたちの紹介記事をつくってみよう！！」

予めふれあい動物を会場内に連れてきておき、参加者はどの動物の紹介記事を書くか決めたい  
えで、写真を撮ったり、スタッフから話をきいて、動物がもつ魅力を紹介記事にした。最初、講師  
から動物の全身の写真だけでなく、耳や目、模様などに注目して特徴を発見して魅力を伝えよう  
との声掛けがあった。

#### (4)参加人数(人)

	4月	5月	6月	7月	8月	9月	10月	11月	12月	1月	2月	計
～小学生	2	8	8	5	2	2	2	4		2	2	37
中学生				1				1	1			3
大人	2	6	7	5	1	1	1	2	1	1	1	28
計	4	14	15	11	3	3	3	7	2	3	3	68

※7 月、11 月はワークショップ参加者数

- ・小諸市支援センター(中間教室)職員が在籍児童を5～6名を連れての利用がある月は人数が増えるが、徒歩で来る都合上、夏期及び冬期の利用は減少した。
- ・ほぼ毎月参加する家族 1 組があり、小諸市支援センターの児童の参加がない月は貸し切りの状態だった。
- ・ワークショップでは、個人で居場所を開設している保護者の元で過ごしている児童・生徒がその保護者とともに参加するケース、子どもサポート利用の子どもと保護者が参加するケースがあった。

### 3 参加者の様子

#### (1)通常枠組み

- ・現時点では、ほぼ毎月参加する兄妹 2 名を含む家族 1 組がいた。当該児童らは基本的には動物介在コーディネーターが対応するが、活動内容や参加人数によって他の職員とも交流した。当該児童らは定期的に登校するようになった。
- ・保護者の同伴を求めているが、保護者から離れて、参加者が動物介在コーディネーターとの活動を希望するケースが見受けられた。
- ・小諸市支援センターに通う動物好きの児童が猫の写真撮りたいとのことで、活動の場の提供につながったケースがあった。

#### (2)ワークショップ

- ・参加した子ども達は写真撮影や動物とのふれあいを楽しみながらイラストを描いたり、紹介記事のレイアウトを考えていた。
- ・犬の毛色に注目して、「ハートに見える」ところをアップで撮影するなど、子どもならではの視点で写真を撮影し

ている場面があった。

- ・「山羊の目の瞳孔が横長になっているのはなぜか」という疑問を持った参加者がいた。山羊は草食動物で、野生では肉食動物に捕食されないように広く見渡すことができるためと回答すると、そのことを紹介記事に書いており、動物に対して興味が深まるきっかけとなる可能性があった。
- ・2時間を超える作業時間であったが、参加者は皆途中であきらめることなく、仕上げてから帰宅した。
- ・子どもサポート利用の生徒が当該ワークショップ参加へステップアップでき、完全不登校であった状況から、共通の話題ができたことで担任の先生との関わりが増えた。当該生徒は通信制の高校進学を検討するようになった。

#### 4 今後の展望

「みんなラポール」は、小集団での活動を目的としているが、参加者が少ない場合もあった。10回中、4回は1家庭での貸し切り状態であったが、結果的に利用者が小学校へ行けるようになったことは評価につながる。

「子どもサポート」は対人コミュニケーションに苦手意識のある対象者に対し、動物を介し、特定のスタッフとかかわることで安心安全な空間を提供している。これに対して「みんなラポール」は段階的に個別対応から小集団の集団生活へ移行していくステップアップの場である。不登校やひきこもりなどを体験した子どもにとって、小集団での他者とのマッチングがうまくいかないと、新たな傷となったり、苦手意識が強くなってしまう可能性があり、注意が必要であった。その点、「みんなラポール」は動物に興味関心がある子の集団で動物のためにという共通の目的があり、会話がなくても個々に手を動かす作業があることで、緩やかなコミュニケーションの空間となっている。動物というキーワードで、安心安全な個人の居場所に加え、「みんなラポール」という集団生活へのステップを提供できた。

センターでの「困難を抱える子どもへの動物介在活動による支援事業」の個別対応である「子どもサポート」の利用枠では、小学生から中学3年生までの利用に限られてしまうが、その先のステップアップの場の1つとして、「みんなラポール」の利用を案内できるのは利点である。また、中学3年生の子どもサポート利用者の場合、個別対応からのステップアップとなるだけでなく、支援者としての参加の可能性も期待できる。実際、当所のふれあい事業やイベントにおけるボランティア枠であるハローアニマルサポーターへ保護者とともに登録申請をされた生徒がいる。

長野県動物愛護管理推進計画で規定されている毎年1回の子どもサポート関係者との連携会議において、小・中学校の関係者から、当所の事業は、「動物好きな不登校の子供たちにとって自宅でのひきこもり状態から一歩外に出るための楽しみの場となっており、ありがたい」といった意見をいただいている。

今後もセンターでの活動が困難を抱える子ども達において自己有用感を高める居場所の1つとして機能するよう努めるとともに、児童福祉、教育機関とも連携でき、多角的な視点から県民生活を支えていける分野であり、その重要性を認識して業務に努めていきたい。

#### 5 謝辞

ラポールワークショップの実施にあたり、講師の先生を紹介して下さったギャラリー1045の大谷典子氏に深謝いたします。